

医学博士川喜田愛郎君の『近代医学の史的基盤』に対する

授賞審査要旨

本書（一九七七年刊）は、現代の学問的状况をふまえた立場から書かれた西欧医学の通史である。古代、中世に遡り、現代に及ぶ二卷四十三章、千三百頁余の大著である。特に、医学が生物学と結合して初めて近代科学の性格をもつ端緒となったハーヴィ以後の近代医学に重点が置かれ、十九世紀に到って初めて医学が「病気の生物学」として確立される発展過程、更に今世紀三十年代に革命的な変貌をもたらした状況が、精細に叙述されている。現代に近づく程際限なく多様化・分化する諸領域にまで立ち入り、すべて忠実に文献に即し、人と業績と思想にわたり、透徹した見識と柔軟性をもつ批評によって貫かれた壮大にして密度に富む力作である。

著者は、先ず、近代医学の源流を、十七世紀のハーヴィによる血液循環論の確立という生理学上のモニュメント的な業績に求め、これを、解剖学者ヴェサリウスの労作「人体の組立て」と並んで、西欧医学の転回点とし、ここで近代的な意味での科学となる端緒をえたとする。これらの業績は、ギリシャ後期に始まりアラビアを経て中世において体系化された西欧の伝統的医学体系に対する反逆である。この意義を正しく評価し、近代医学のその後の発展経路を明らかにするために、本書の著者は古代、中世の病氣観と広い意味での医学に遡る。特にヒポクラテスとガレノスの二人の巨匠の思想と業績に関して、その本質的意義と後代に及ぼした影響の広さと深さが詳説される。更に、彼ら

を経てイスラム圏を迂回して西欧に戻って爛熟した体系が、やがてルネッサンス及び科学革命に遭遇して次第に崩壊する過程が叙述される。

ところで、「医学」には様々な異質的な問題が含まれ、人間観の医術への係わりによる様々な形而上学乃至自然哲学を背景とする「生命」乃至「アニマ」の問題、その他甚だ多岐にわたる問題があるが、著者は、これらの問題の多くが、潜在的な形で現時もなお医学・医術の底に潜んでいる故を以て、敢てこれを回避せず、これらを通してヴェサルゥス、ハーヴィの仕事が画期的であり、近代科学的医学の決定的な出発である所以を示す。

しかし力学に先導された近代科学の理念と方法が、決定的に生物学に浸透するには、十九世紀後半に到らねばならなかったとし、そのため本書の後半のかなり大きな部分が生物学の歴史に当てられる。

医学史の事実として、案外に、医学者たちがしばしば病氣そのものに直結せず、観念的傾向があり、そのため病氣の記述が多少とも組織的に行われるようになったのは近代に入ってからであったことが指摘される。これに貢献したのは経験主義の根強いイギリスの医学者たちが多いこと、臨床医学の基礎としてこの病氣の自然誌の整備が科学的医学の第一歩となったこと、十八世紀のモルガーニを先達とする近代病理学者たちが更に進んでそれらの病変の所在を屍体解剖によって確かめ、病氣の理法に近づこうとしたこと、更には十九世紀に入って、ビシャによる「組織」概念の確立とシュヴァン、ウィルヒョウによる「細胞」の発見という生物学史の画期的な事件を背景として、医学の生物学との実質的な結縁が成立したこと、この生物学の発展と医学との結合が病理学の近代化を強め、ついに現代医学に到ったこと、この経路が近代医学史の軸として詳述される。ここでフランス革命前後の「パリ学派」から、十九世紀

ドイツ科学及び医学のめざましい発展を経て、グローバルな姿における現代医学の状況を生むにいたる経緯と問題構成並びに方法の吟味が詳細に叙述される。

生物学に立脚した医学は、当然身体的な病気を対象とするものであるが、これと精神医学、衛生学との脈絡は必ずしも明らかにされていない。しかしこれは事実上兩者の間に強い連繋がなく、又共通の問題意識を欠いていたという歴史的事実によるものであろう。著者は、この事態を、病気が人間における現象であるに拘らず、自然科学のめざましい成果の陰にしばしばそのことが忘れられがちであった事実に基づくとして、医学が改めて人間の問題に深く立ち入らねばならないことを指摘して、本書を終えている。

本書の大きな特色は、「病氣」という万人の悩みに当面した人間が、歴史の中で、いかにそれについて考え、いかにこれに対処し、何を成就し、何をなし遂げずに残しているかの反省を裡に蔵した内面的思想性に充ちた医学史であることである。本書は右に述べたような近代医学の成立に対する詳細にして透徹した開明を与えた外に、特に新しい意義をもつのは、今世紀の三、四十年代に始まる革命的ともいべき生物科学の発展に拠って近代医学が急激に面目を改め、医学の生物学的局面がある意味で限界に近くまで開拓されてきた現代の状況をふまえて、この学問的潮流の一端に参加した著者によって書かれたことである。本書は夥しい文献と博識に基礎付けられた我が国最初の本格的学術的医学史であるのみでなく、右の点において海外にも未だ例を見ないものと言ってよいであろう。